

80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8 9



15
門號 1521
卷



信濃湯華首

今學者從事^於著作之場，餘業必及隨筆。隨筆不能掩其學之淺深者也。其辨物也，不擇古今；雜載雅俗，其惠人也。鼓舞初學，起予老成，但其精而小，往有之博，而不駁雜。難得其人，是豈學之不勤哉？抑年之不長也。五十槐園先生以英邁之資，考万葉集，解書紀歌，一往破的，精義繹紛，在賀茂翁固為忠臣，在^至本居老人亦稱難兄。自荷田氏之學興，先

生蓋鏘；焉嘗病於信濃，寄舍中夜興歎曰：可惜上古辭微，吾誰能解。天地諒此心，使身保數歲。壯哉先生之志！古所謂死而後已。先生有之，其子久守子，出示此湯筆，且泣曰：械；庭闈樹僅拾數葉落。唯顛有人見，或以為有色。余聞之，愴然曰：是先生病間答人問者乎？頗似萬葉別記。昔人有癩預，盛德性理錯，猶著書者。先生雖病，亦復勉焉。致之，下筆不休。可謂壯矣。惜夫才高而壽短，業不

酬其志。設使先生得及六七十，若干十。其所辯惠無寧。唯是雖然，有其子，在焉。必復繼之以汎瀾瓊富之業。先生死而不亡。

文政紀元至日 尾張秦 鼎撰

尾頭脩書



神代の之後久より其の後も未だ
往々言ひ難い事は多し。又之に加
ては、其の歌と舞と婦の事。
歌は、其の歌と舞と婦の事。
其の歌と舞と婦の事。

久しくあやしめずる人こそせのむとみ
もあたるしん身みかくら文ふみの方へ出て證
きりほとてを解わかめ、かくら世信農湯
屋やでとかくとまなづら詫わざくにまはり
おもむくの寺てらへかまつまとま
里さとへかば若わかな御ごれにまよひて伏籠ふろ
の川かわへまよひて伏籠ふろにまよひて伏籠ふろ

旅たびへゆきまよひて伏籠ふろにまよひて伏籠ふろ
かまくとまよひて伏籠ふろにまよひて伏籠ふろ、ふ
くとまよひて伏籠ふろにまよひて伏籠ふろ、ふ
たとえかくとまよひて伏籠ふろにまよひて伏籠ふろ、ふ
まよひて伏籠ふろにまよひて伏籠ふろ、ふ
かまくとまよひて伏籠ふろにまよひて伏籠ふろ、ふ
かまくとまよひて伏籠ふろにまよひて伏籠ふろ、ふ

もんまくにひく

けぬ食のあら

ちくわ、ひづは 大坂、口搗

觀乃藤葉信濃漫錄

荒木田久老

享和元年九月信濃の國より下りてに作每月善光も
中りてくがひどとすゝも圓満本尊宣きものゆきせんす
ゆていよくこころ絶やううれやえをきひのち全幸^{サキ}くてか郷^{シテカニ}
アモツカニ クニツカニ ヨヒイミ ドツ
ヨリモナヒ本^{トモ}と云ひ能^{ハシ}也復^{ヨモ}乞桂^{ヨモ}をも

生地の能^{ハシ}も宇至のへりもおもく勝^{ハシ}をれとゆも

あたゞ古語

七月大吉善光もとゆきてみふくすきなんと一月の乃
わもひとく風^{ハラハラ}とくされば古義^{ヤシ}も
ゆくらむちゆゆめ^{ハシ}こめとくじとれと古義^{ヤシ}の

さうのうげてねまひきや

○莫囂圓隣の歌の訓

源氏の家人千葉貞性と毛利元就と日本紀牛の齊明紀の童謡と莫囂一の妻莫囂圓隣之の歌とハ荷田大人の秘言^{ヒヨク}と加賀翁の家業考よりこれらも古事記の家業のかくいひなつて御考るものもむかづき近づけ宣ものと勝間とも考を舉たり宣毛の考より近づけやめやめ翁の考よりばくや又大人のほ説もありとみくみくとつゝと已若くは、荷田のまと藤^{トモ}はさきよ日本紀哥の解説の著述を著してそれ中に鶴おさりおたと京師の書籍にて印行せしもハ被をえりへり荷田義廉万の考ハ今之紀の字次のまくみて別きくはよろづまよいくとども

べとちひまとねびとまことあー上田林成がひきう追考もあきとねあうざりとくり宣もの考ハ文字數まくつじ紀より合して西アヌラトモモト莫囂圓隣の哥師の考より初るときのくよのとよ角きへいとせ紀の國行章ふきのくよれふくよて引きとハリマヘキシマヘヒ紀の山をこみていつくよゆくみやまた第二句の大相をやるとよすきもいがるをとくとんにだぐへー見ハとと大相土のこまをやるとよすきもいがるのよしきをその王のまをまの張まとて次のまよとよきくもちひて大相の二字まとやうかとよすれうきーものとよせわややれ言毛とよすきもくらんたまくもく筋白とよすきやまとよすきもいがるやその筋子みよあれう角とよくかとよくはあやゑ

久守云新勅撰に
かきのこも
とくおもひのま
かわれとほのむ
あがひたたひ

と制どりもみてうはハ即囂のまよあくまいかぬとくさうじよ
ハ莫のま行きり第二句を霜吉兄氏湯氣と改めたりもい
ケドヨリカニ霜ハ橘土野面あくまゑわづたひくやうす
とくみなうひばれ山上アキイムシテモクニ雪モナリ
雪ハ暗ホコトナレハ消てほやモリモリズベクレド雪ハジルモ
のふくモアツ絲ハいつもとゆき、くのきこのま二句の制ハ
詮もいかゞアリねまへうち歎をあよ考出べよ力カラム
スミムセリハシヒビウサハ雪圓ハ山の
形みて倭姫命世記ニ圓留有小山其 所乎都不良止号支
とアスムアヌキハ莫囂圓ハ耳無山也耳無山は屬モハ香
具山されハ莫囂圓隣之ハぐ山れとくも色アリ天相王ハ

書經洛諸天相東王とちひりよる事に大下相土ハ國凡
ナリ。色一兄凡謁氣の兄ハ一本死ニ為きとぞ凡謁の二字ハ
靄ノ一字を誤認との事。元靄氣ハさやまとするハ才ニ二句
をハくよくさやりみとくじへきセオ三句ハ舊訓ナリ四句ハ宣
長の訓又從ひて之にぞとくじての集字はあき御考思へそ
リ定むるを考五句を詮院ニ嚴檜ガ本とせんハよりによゆく
きと己接ニ嚴檜うべハ日本紀垂仁紀ニ磯城嚴檜本とあり
て倭姫命世記ニ倭國伊豆加志本宮ニ八箇歲奉齋と見え古
事記の哥ニ美母呂能伊都加斯賀母登とありハ磯城嚴檜
三諸嚴檜ともよ倭の國みて三輪山をさあくとよ在と云ふ
之ゆきバ嚴檜本紀の國ナリ。ヒトとわかつてゆき一色ハ古寫

久守云いつう
とハ本とまつ
トとくことなる
ト倭姫世記古
文解本

の一一本又五可斯何本とあつて斯ハ期のまれとの譲言也あつ
也ハ舊訓のまゝのつうあるふもしくも

莫囂圓隣之大相土死靄氣吾瀬子我射立為義五可

期何本

あゆも登香山望國の哥のあゆをもておもに是も中天兄
命のかく山の登りておもちぬうじ本をあそびやア國兄の
さやなすをねまへ後もあそびおもくまきて紀の行幸よ追及
あはうのふくきうひおだいつハあくひと夫君と急あぬひ
きひてよもやせれ哥もく

○多鷄蘿香

或人問とて翁君の陵奥石碑より堀出する田道が碑と云ひ

ヘア哥よきけとうとりよみのあると人々よアセよふきけと
うハも庵さうと曰言と曰候すもいひ室ちもあらひひと
その主の靈廟をたまもくつみうしむねまへ是もハ此地あ
里もアリムナシケル所ゆゑと云ふよ已善き所ハ從ある
ねまくよきけとかとしよ言ハまよも六の事アリ玉敷
而待益欲利者多氣蘿香仁來有今夜四樂所念と云ふ
ありとて他よアキタる事無く此夢たぬさうとつゝを云ハ通
せばかとどりあぬたけをもみもあくびを向のいきくろい
エとて一首のすのきをひ難むすくてあぬさうあぬたけをう因縁
をとのへあハみこまえとつづくあぬさうハ既よ茅柴三の
峯の解説の落葉のあたよひあけるあくまよハ年月日次

久守云此あまと之
る頃を子孫うめめ
る解ふ冬トより
ハシラスミテ春解
ハキタミテ秋也
モロシミテ

の來往^キ行間^ラとひよこて事榮^{ヨリ}十七日近くあり^バ今二月
大木とアミナルも角^カアタサシハ間^{ガト}破^サリとひよ源氏本宿
よた角^カさうれとあるハ間^カの角^カもるをつよとくもと又た角^カ
とひよも間^カ破^カりをひよきりた角^カさうて来た^{ハシマ}ハサエ
玉處^{ホド}とお役^カとよ理^カりあら^ハ右の^カとある^カと
ソハ一首^{ヒコ}を^ホバ一二の角^カとよく^カけやうとや頑愚
の後^カ四^シ行^カとめ^カづ^カ近^カハ宣^カもの^カく^カみと金^カとの^カ
かひひとひて^カとも考^カひひもれ^カともね^カハ^カとも^カ歎
く^カく^カ騒^カび^カき^カ予^カう^カ海^カハ^カ凌^カ礫^カの^カと^カ其^カは^カ船^カ多^カ氣^カ
あるハ^カ荒^カ海^カの^カ波^カを^カ騒^カきて^カ船^カを^カ携^カ出^カと^カと^カ土^カ作^カ日^カ記^カと^カあ
と^カも^カ船^カの^カあ^カざ^カよ^カあ^カよ^カて^カと^カも^カ波^カと^カあ^カざ^カて^カも^カ

林の退^カくせり^カを一^カ筋^カよなげハ^カレ^カと^カ字^カ画^カの^カい^カと^カハ^カレ^カと^カの^カ強^カり^カ
ま^カと^カ又^カ萬^カ葉^カ等^カ十四^カ可^カ奈^カ之^カ伎^カ我^カ古^カ麻^カ波^カ多^カ具^カ等^カ毛^カ
用^カひ^カ和^カ波^カ素^カ登^カ毛^カ波^カ自^カ我^カハ^カち^カり^カ夫^カの^カ馬^カハ^カま^カる^カよ^カ又^カ馬^カあ^カき^カ
ゆ^カきて^カな^カと^カの^カ頬^カの^カあ^カざ^カも^カの^カも^カ流^カくる^カ又^カ武^カ勇^カの^カ兵^カ
た^カけ^カと^カり^カふ^カも^カ流^カくる^カと^カす^カと^カう^カハ^カレ^カそ^カう^カみ^カそ^カう^カめ^カす^カ
な^カと^カり^カふ^カう^カす^カう^カ同^カ言^カみ^カそ^カう^カあ^カひ^カそ^カけ^カみ^カそ^カけ^カ
を^カめ^カそ^カけ^カと^カあ^カざ^カも^カハ^カレ^カそ^カう^カハ^カレ^カそ^カう^カめ^カれ^カ
は^カお^カの^カ手^カハ^カ玉^カ處^カと^カお^カ役^カり^カへ^カた^カの^カと^カあ^カや^カと^カ云^カわ^カれ^カ
き^カ来^カす^カや^カ今^カ夜^カう^カま^カへ^カた^カの^カと^カあ^カや^カと^カ云^カわ^カれ^カ
き^カう^カと^カも^カう^カと^カハ^カお^カの^カま^カす^カと^カう^カみ^カた^カり^カと^カり^カハ^カ威^カ人^カハ^カう^カき^カ
ア^カだ^カい^カう^カあ^カい^カむ^カは^カ人^カの^カ兵^カと^カ後^カろ^カぞ^カ

○ 波太禮

或人古今集之庭よりたきよあるものかやるえうくとある
もと此のまよひ況あ是とづゝもどありては宣ちのり人こと
くすよすうと因縁といへりあるあくろみてよもくとせゆ
況と承たゞとづくとも言ひる。ハたどきをやめざつむりとしら
く中古以来をとまつては流の既うて集の事と深く考びて音
の色よまんたりてはみるをもとよまく色もくれぐ
固もとづくハやとくとくには後もわりてへうがれとある
らば美琴集十本よわう園のまの花う庭うちむだきのいふ
遺アたるうもみの手班ハシテのめりとなりてまたまとめの花
はよ疎香うまくよ零ゼロとぞとまよなうとじるとけの花をも

争ふ事よはせ走
十本有と走三
絆とひきも
走六庭も萬大
郎すまひけり
押呑よるハア
もとすまひて
けりとあるおお
己は高翁ニを
おもれたり
よくひよす
又後小己まく
波尾翁也波太禮
波外とまのう
衣のやどもえ
よのゆきよ

是よ班ハシテよながれちるとなつてよよめりに又巻十本の
紫よえあれ零覆ハシテとあらも班ハシテより覆カネフとづくひとせかう
小もねおやめと班ハシテとてハ乞のとあらひ這カネフモハヤどくと因も
司よれハ是よぞのとくとほりよすおちよくのれ、あのまハ山よに經波よ
立石の附門人丘岬後平アカシはとくよのれ、みよれあられ
あられのれの化よ因アカシととてとおのれとくじ更よ考ぐ
え波アカシハ波奈とあらすくて巻波よ皮アカシとくよとあらすと古全集
よハとくよとくじひ垂仁紀よアラスアカシの赤裸アカシ之伴ヒヤシといふ故
の名を曰事行アカシハ赤花アカシトアリミテそのそれとくハ初ハタハタとく
ちよて高葉集十八よ鶴河立取らさむレギハのえのえ我波多婆ハタハタ
あるも其之初ハタハタとくよも今のきよ風アカシこれ故アカシこれとく

萬葉のものあられとつて原のひ草よやむをひとさる
そくを風それ吹のひ草アハ陽陽じとどくそくを吹それあ
のひ草アヒテウシマヒトドクソクスルをあられとえられ、
カムスアヒテウシマヒトドクソクスル零きの毛とそくれを風のひ草アヒテ
モシテアヒテウシマヒトドクソクスル零きの毛とそくれを風のひ草アヒテ
下の地ハシテアヒテウシマヒトドクソクスル零きの毛とそくれを風のひ草アヒテ
言ふ毛の毛とそくで零きの毛とそくれを風のひ草アヒテ

○ うきじぐ

波太波奈の毛アヒテウシマヒトドクソクスル零きの毛と
名ハ燕の翅の形アヒテウシマヒトドクソクスル零きの毛と荷田大人の
いえまよ師の菊辞考アヒテウシマヒトドクソクスル零きの毛と

をすに山アロ按毛は燕子花とある傳字アリありひとせ
而毛アヒテウシマヒトドクソクスル零きの毛と荷田大人の
都播多衣少須里着将衣日不知毛又因裏ヨメキツヅギニ寝
ム拘つけまどらとの服曾比猶もる月ハ未ヨアリとありて上
古ハ今アヒテウシマヒトドクソクスル零きの毛と荷田大人の
或バヒヒ地アヒテウシマヒトドクソクスル零きの毛と荷田大人の
ナセホウキアヒテウシマヒトドクソクスル零きの毛と荷田大人の
トリスナテモの件社の營の事と云ふ書付合服兒欲得ともヨハ
かきつゞハ書付合服兒欲得ともヨハ着をつとめり
古傳ヘつきつゝつもすとつゝとつゝとつゝとつゝとつ
てえまつの一言ぞ着の毛とすりくる船のつくる舟を津とつゝと

とひふるあらま
九巻纏合を寄よ
ワのものかこの
山のものかこの
津のものかこの
をも男のゆき
ひさと海毛摺市
かくすもはま
まちき同
トテ又天高市

和豆ノミヤづあハ官就子やつあハ賤就子たすく既に日本紀
一奇解よりいももくともあもるゆと又何津夷アリツハ之よきよ
もと宣もういひハ非也津之とゆうひとくも古傳よりあとを
改て之よきよもくはあくドモキモモ何就とひふきとそれやめ
きその就とひふきの古傳多々ハ家就盧村三諸就アヅクみづ
く磨づく磨づくなとひよつくをて非く傳ソラムみて慥ニ附着
どるをゆもあへ言をよく考てかくよせ

○三諸就 鹿脊山

右よりノム中ノ三諸着ハ矣繁差六四丁ノ三諸著鹿脊山際爾
云々著七丁ノ三諸就三輪山見者云々とあうて鹿脊山三輪山
ヨウシハキクノ詞也とを附徳ノハ天降就の傳ソラムみて慥ニ附着

中も山の部ノ時ノたり或人ハ生緒懸の落字とくとその落
葉字の健ノ得うてなく而ハ深く考びしむとせばかよまうせて
誤字とてみとれ又字を改びとどくハ古文を是へるわき
ていとあるとて今古がよみてはあもじ浪ハ
然とくとくとてすねん得うてか得字みやとおやくとハ古
文字と探りて四合せて考集序或ち書古文と懸ふ徳あり
ひみとせみ字を改びべくとたぬくのとれ字人のやよすうとて
み字を改めなまくいみくとむりもどりやうめいとを考究字の
事一のやひたうくとて三諸就ハ浮字とくとく三諸ハ糟
の酒の名字の云々日下紀の御ふも酒の名字三ハ酒の字と云諸ハとく
と涌もるを云セテハ難く漏る字の著れ又ハ造れ云々

と此のうちに此の鹿脊山より入食稻のとシテヒカセキ三
輪山よりは、又源のと酒のと、の源くよりあらうの本ハ被
區志考ノアリ。此をあらうて寫おる。参考也。

○赤細 步布裳

あの玄蕃祭の四の事ニ而起て、もろ千の事千六の事ふも見え
た。續鈴月代の導師のそしめも、もうつた。よ秋の山を、
詠すみがあらう。源氏義も、もううつた。の事をとみふ。や
ゆきともたやく、もはうつた。よやまひとくしてとくまくとあり。四絃
よ一向の音と。或ハ偏の音と。とくとく集めの事より、も半音
の音とをいへて考へよ。偏の音とみて、とくとくは遠づぬ。以て
萬葉四章を、偽り。秋付而曾為流。赤布裳真吾妹兒吉二戀目八

トである。赤布の二字も、うべくこと訓て、布ハ布帛の義もて一向或ハ偏
の音とてよくやか。を今か于都之久とよめ。ハ所用あり。さ
はハ布ハ赤と判別する事。玄蕃ニ至る。布榜の手枕纏而とあ
る。より。赤字牛ハ毛色く。又えたり。また又續日本紀京職大夫
從三位藤原朝臣麻呂負圖龜を獻。是時の宣命。上。歡賜。嘉賜。
因所思行久者于都斯久母皇朕政乃所致物。尔在。米。耶。云々とあ
ゆ。日本紀。ハ顯の字をうながして。判たり。あくハ于都ハ乎
都。かと同言。かて。次生とのふを。今を。かく。見る。是る。あ
くのあくよ。同。と。被辞。也。是る。と。て。按。よ。赤細の。と。白妙敷。か
のく。ふて。軽く。落。る。被。れ。ハ。おの。妙。と。布帛の。妙。結。と。て。ハ。の。た。く。の。も。さ
于都。之。久。も。于都。多。敵。と。却。く。つ。み。ゆ。て。今。の。せ。れ。文。字。す。音。の

ましに現すこりの事の古きなり

○如是許

あの云葉紫集序より多くと押ひて考へる事三、如是谷
裳者祈奈年君亦不相可聞とりの哥よ経せむかくもてそ
の驗する記事をあれやうにちとくふきの事也古今集より
形々とりのもの見たゞりて此やうするあつて
じふとやく是よ因へん事は又えだる。如此故に如是谷裳
如此而如是耳之なほいに云ふ事あるのと見て右肩へ也

○らくうる

ち年中郷よりと云ふ人云

生れられれのゆゑをあくうれてうせやうあるか
タ部の本

是ハ元れ以哥みやとりへもあら右の哥はゆゑのゆゑタ部の生れ
てあやめのうへよ遠またてて經野のかずてむろあひある
す。其後たゞ兄み哥うてすと人のりへもとてす。有たる。それ
をうえゆゑとこのひきとへ或人云。おの四哥れあくうれゆゑとひて被ふ
え。古奇よきて月はあくうれ。是もあくうれゆゑとひて被ふ
あくうれゆゑとてます。第てひくふもとねややくをもゆめ
くくゆくよゆゑとたくてめくうれハ例めにひくみやとくく
あの本多のゆゑよさうねやうよヤセとくくとくくねや
着く。ハづく松を更るハ脚がれう掌の脚うきはくくよ

ろもやひゆるうとを若きしゆくへハ傳よカタク。翁入のまご
えあへでりへるハ後れ御代の哥ト
梅うきよハれのう姫翁をあくうれてやるのあすまよ
はととじよとつよ奇あり是ももじうきよめととひに云
あうり後れ御代の哥ハ子載集の義らきよくも後れ御代の後り
落ハドす。後成マそのむうを漏へにて子載集の撰す
へばかあひ方の翁若ハび人たらみもきこえた。情覽草譜と
おやめれがりう家の師とのもじよのねうあくじといひされハ
或人より人よりうねそのねまく被或人來て云翁若れ
後れ御代の哥をひしよばほりもどりのば本す。之
からしてねすまぐれの爲へひよあくうれとりふうとある哥も

え國をすちよすまが一て是が中ふあくふによおなきてり
ふがとくまれてあくハものよ署へつてつてふもすりぬがきと採
て例真記を捨くばよちくじくとあの端頑愚の事とくと
しそのまよた。すよあくいたくややの従うハセのサをあく
うれ出る門をきりきりヌモれおもくとほのかくとわう
「もあくもひよかととそとくいに翁若宣せう古と集を慶
よあくもひよかととそとくいとあはと翁のまよとれとあも
ひて翁の席とお座あくとあくとて化よくもアシキ傳備
りよよきよく神あく、これとひよかとハあくの御め立とくをハ
ううと因共とハきれもまだかくふへうれど右より翁こくう
あくをゆてハよよあせざるふあくのあくのあくのあくのあ

久守云其文家
集よりあり
矣より附べ
てあらまへき
うちもも

在
らじかくよあかせの見くへいつくのくすて處の見うれ
目うれづれなすとくようれすて難義生所を難易^益を云
うも月はあくまし難はあくうれなとりと月をもてくわ
まふを難^{シテ}すて此をとて古奇よあくうれとくわるもとくは
あくうれとあるとくりをすて考へあぐを悉^シ貫通して書
本ハあ

○歌の風致の論

近ころ宣モウ顰^{ナガ}る能歌の風致ハけん無^シてたゞい
さうの歌をえどじきとむのくせんと歌ハ一首の風致相^トの
あくべを考へとくとくやあくべを海とくとくを理とぞそ
ゆて歌と洋と海ハ風致の歌ともくねむうと既^シ言也

久守云其文家
集よりあり
矣より附べ
てあらまへき
うちもも

後咸マの歌^{カタ}とくとくとくとくとくとくとくとくとく
歌を詠してお美とハ美の美のをつひて美の本^シのハキ^シの裏
といふべく理^{シテ}とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
わうあ方^{カタ}とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
歌必引^シまくいもでハえもくね音^{シテ}とくとくとくとくとくとく
一首の風致をつすきる海もと歌の歌を求めふだ言あくが
陸^{シテ}とくとも難歌あるとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
善悪を評^{シテ}とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
海も先輩のわざひにぬ考へ進の企^シとくとくとくとくとく
まうすよ語^{シテ}とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まこと言ふがやの歌は見え
ゆきは花もお葉もなうりくすとこもくすとけ
よくひい捨てるゆきぬ歌ひて聞の苦やのそひくもつぐ。う
あらへ者かあらへとあらへと見むと宣ちあの歌と角すとと花
もとみらもなふえどくとくとくとくとくとくとく
を失へよとお芦のま夜ゆきの御波はよよ芦を雨打とる
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
わくまきを歌うるものハあの歌はまうかの絆情あるをもてた
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あの風歌とくよとくとく

たれのとを先ふて縁歌を繋のひくとを求て自らよしゆも他
の歌を評するゆゑ此風歌をとすれどもと育て里り。縁歌の
のじひくとを歌を考へとせる歌ハ必おきく、とく情詩もとてせて
おたえ六物のか
ひよすくつるも
やもとてぬまの
やもとてぬまの
よの月とよとせ
えをばうとうも
てぬまの月と
くふの月とくする
とせとたりうく
てばほりへゆきよ
うきよとたけも
ちく風歌うたう
さく風歌うたう
ハ金井底の樹か
とあるさぬこ
とふのあくと
假者の歌をあ
う

○初より古事記

私とせき名人の家小はあすこあるト

之守云假字と。一の
假字の後、秋紀の
私記乎か志とあ
るを引て目を紀合
解よ秀く海れ
などと手の假字
なりとやもひま
ひト

○ れづくをうしの假字

玉器間より可賞ハねじうし代墨透みてれづくに假字又可賞ハ
字鏡よりきてをうしの假字とのて原ハ無尾の透彌とつて
可賞も可賞もをうしといふまハ因鏡也て言鏡よりてとも
にをうしの假字とえひし日記よ

みちみくのちう乃假字てえきうへいうてほづくれ
をうしめまつ羊躡躅の開とめきをみみて可賞もを
うしれ假字の躡とどく又曾林好忠集

小やもむくわらもじ極れ花とちやうりれハをうしや
おでなうひも是あて可賞も可賞も因鏡みて共うをうし
の假字ある逸とどく

○ 犀の假字

大猿洞後秋よりれをれうしの假字とせんハ是もむだり紀経彌多リ
常陰喜セヨ侵の字をきの助辞よ假字を後とてをの假字
と師れ言あれうまくよとゆへー吾郷の方言ようううすと
すふううりくすとまくどりふうハをよゑよ例されハを聞さ
例えうりふうかつハをうしと因鏡とこそあやめき
とくおむうーの
暗地どよみてな
づみかきはキ
えもとわう

○ 臨時大祓建禮門にて行ゆ明證

手ノ門入乃波國人承井將吉義酒後辭存疑といふを著して
宣もう師役を被してうへてむろあとせぬハ其一記録より
とそりとく機キホトにて何くれと説いてアセよだらセーも初の條よか
後篇の考又臨時大祓ハ建禮門にて行ひ候といふれ一貞觀七年
七月廿九日先是武德殿ノ前有入死仍大祓於建禮門前トあ
はをえていられたる也是ハ内裏の穢アシたるがよばニ建礼門よ
て行ひたるも其候あるかあへてハ陰附のモ朱雀門トてみ
しと後移りてハウヘキモトモり云ひて陰附大祓ハ達礼門
定まつるすと之を取考るに三代實錄曰元慶六年夏四月
甲午於朱雀門前修大祓アツチ去八日大膳職人死平野松尾加茂
等祭停止故也臨時大祓於建禮門前行ト之因穢不可用大藏

幄仍用采雀門也トとく延喜式トも大祓調度ト朱雀門前ト
て行トニ季の大祓ハ幄なく達れ門トて行トニ臨時大祓小
ハ幄あるをもてその行事所の別トアシトハ省院東
廊大祓トモハ元來建禮門大祓兩儀ト時東廊ト用ひらきし
を中古内裏燒亡建禮門未作之間ハ彼の兩儀の行事所を
用ひトてハ省院東廊トて行トリトモハ省東廊の大祓
もハ省院燒亡の後ハ又於建禮門被行之ト事百練抄文曆元
年仁治三年の條ト又えたりさてあの建禮門トて行トルトアシ
ハ主門の端トて行トリト此門度トたるものつとうの
ひよふりあトじ百練抄ト承久元年大内裏源賴茂ト兵火ト
罹ト時南門ト承明門トを舉て建禮門トいとねハ支トる

以前廢たるあるべくすて文暦仁治の頃ハ大内裏廢絶を起
を建禮門の後なる事數々往來を又臨時大祓もし差すあり
て除服諒闇終大嘗前八月晦十月晦同十一月晦伊勢齋王ト
定同群行等ハ朱雀門まで行ひ其餘ハ建禮門まで行ひ也
委ハ文徳紀北山抄等よりそぞ二季の大祓も應仁乱以前ま
でハ行ひよしと傳へ一蘿戒記曰應永廿年六月廿九日丁酉六
月祓如常大祓參向人々可尋註同世三年十二月廿日己未七大
祓被付所司歟可尋又康富記文安四年六月條より大祓被行事見
えり其頃ハ朱雀門の端みて行ひよしと傳へ一 大内裏ハ承久
以来廢きたれとなり

○海川み越とりふ例

或人云近古有ものかあくもとりふ事を経人多も多
あやして規範とせよ彼海悉くよろづにあやとひり善い
あくひ言もハキよとタクシテ俊傑されハ多き者の人れひき
なに眠どさる海を企乃よべうぬ事されどむとたむこと
いも、彼書けよ山とはあせとりひりうよハわざるとりふ事を
みて海川よ越とつり、ハヨリとあらじとお紫毫十二五十保里
延故要寺保伎佐刀麻豆於久利家流伎美我許々呂波和須良
由麻之月是るいよ越ゆといふ事をいへや又其十一丁^ノ海海
奥白波雖不知妹所云七日越來是ハ海よ越ゆとりふ例をひく

又もあすり代りハあいうちれの内れもあく附ふ事
なを西行慈圓ゆき此様を犯してみまくよ文言あすりのものを
おやくすゆきへるを起てよりて猪は多一とくや久老
考にあせまニヨ猪か之人すよ

トあ清も代春^{フニカタマテ}月設而幸之^{イチシ}のちとハおとやえむら
もあの多ニヨ九言一カとせきは余あいうちれのじぐに八言の
カ六言の白ホア禁集ナヨは多一又後撰集ナヨあいうちれのを
トおじ字あすりのすあすりた角くを今を小なりのとくを宣モ
の廊とおねまハとすれ、のれ廊を出でスル所ハ西行慈圓ハ集禁
ユ清も代春月設而幸之^{イチシ}のとくもあうれば右の猪ハ
宣モク一言とくをくふかくふことのません後ハ之のまの

云をたれまじてやまじてあ

○清濁音便

あくまくに和郷^{ハタケ}ニテキモ京師の人病床^{ヒツ}ニ付來
ていひくは遠江人の著^シく清濁考近あり仰行^{ムカシ}ニ見給
フミ^シやつ伴^{ハタケ}いわくとくと著^シく彼書ハ^シくよ京に挂^スるをと
門人城戸千^{トモ}千^{トモ}も傳りて^{シテ}たまちまち古事記傳^{シテ}く
アリ不を主張^シて古事^{シテ}を拔出たるを^{シテ}あて變^{シテ}く^{シテ}もあ
事^{シテ}言ち^{シテ}況^{シテ}古事^{シテ}を^{シテ}く^{シテ}も役^{シテ}は^{シテ}へるハ古事^{シテ}と^{シテ}と
も不^{シテ}とせり^{シテ}を誣^{シテ}の^{シテ}も^{シテ}あく^{シテ}や己既^{シテ}古語清
濁論辨一冊を著^シて門人脚園主^{シテ}計助^{シテ}著^シ言^シ付^シ行^シ並^{シテ}己^{シテ}
清^{シテ}ハ古書の^{シテ}小説^{シテ}古^{シテ}書^{シテ}言^{シテ}の^{シテ}序^{シテ}ハ音便^{シテ}く^{シテ}れ

たる後の拗音もさすがに音便には半言音便多々れどもうは音
便ふく濁音るに従ふるもあらむあせば後の言ふて書かんとあ
れハシムキテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
ハ雅言を撰じしれあせハ就く音便ハ上古も今もるにあらむり
濁音の音便の訛音か正音かのバ後の音便も必清音な
れへと後ハ假多々くまえ濁音の音便あはるさぢやさんよ
つたゞく濁音もさりとぢやさんよと渙るちよまあらひぢ
やさんぢもあらハ濁音にて正音もあらひ是よ波して
假も切くまく近江の伴海量云今雅樂家は傳へた風俗歌
音と傳ふよ濁音半濁音ハヨリとくとく又うと云に今のかう
形すも濁音と見をされまくるにハ元來うよ濁音るよがきく

トヒヘアの角己う考ふよく音合せり

参考した後を

とてもうよ音便ハヨリれどもをわのあくをいのとく唱ふ
ふへやうておみも音便の自然な反応であるものと假字のみれ
たのもえの音便よりみこむたるなまく一筆は筋ぬを読むよ
ともむうひと唱の筋と記ハ假字のみをアリと筋と音
便ふとがうひと唱の筋と記ハ假字のみをひうひむ
ういの假字のみをなまく上古東人のうとても假字のみれ
き記ハ假の筋一筆も記す故上古ハ假字を用ひて清濁よハ
強字にあらかじみて今古事考の濁音と記する字を古事考清
音と記すも多く清音と記しも濁音に用ひてふ故
ありて妻一筆へふちぞく一古事考の假字よ遠づくとて矣

望を不^可と^り之^をはあへ強ておの清濁音の假字を^いむじ
ともうはうへきて古を經ふむことりば高僧入云要案
え君の上古ハ正音れどもゆく濁音うへとれきる山號をこうの
そちひうへきいをもとば彼清濁考ハ言益の贊言とあら
れどそれ勤たる所へ可貴^シとくす多^シ勤たる所ハ可貴^シ
とその言益れすすふ力を表せんがゆく情^シ一言もう廓を出
て地^シすよめへきて力を用ひ^シはえ案のねもひぬあぬかく^シ
を考も出来るもじもれをとつてぞ高僧人も可貴ぐとてお
きく來

門人信^シ國人若井春彦^シ翁辭考の中を取^シてあくらふ
まづ問へるをうへ^シをうく

○ あらも手代大ふ青駒

是を今本^シあへるのの處とすめのハあらもての云のゆ
すなへきをひづつて師のやうに^シとよゆきたるい
う也育^シとゆくをひづつまれ候^シ師ハ^シよいもく^シうくも
さあハ白馬の^シよめ^シとあるあくふて化^シ修^シる^シよもとい
ふ^シあらのあへる色^シとある^シ赤色^シをわむなき^シさるを洗^シせ
とほりよたり^シは^シ拂^シり^シと「^シもゆ^シとまく^シ」との文意^シされ^シ大^シも
とまくまくと列^シてよ理^シ又大^シの二事とすとすとすと
とむじく^シ左の一際^シ拂^シハ^シて^シひもゆ^シとまく^シの文意^シされ^シ大^シも
考^シハ此歌^シ莫^シ十三^シまで三野王^シを葬^シるを^シの歌^シ反

え守^シ善^シ馬^シ青
色^シ馬^シ青^シ馬^シ青^シ
色^シ馬^シ青^シ馬^シ青^シ

歌ひてすゞち節よ百小竹之三野乃王金厩立而飼駒角厩
立而飼駒略何然大分青馬之鳴立鶴とあるとて又歌よ衣袖
大分青馬之嘶聲云々と云ふたりあの金厩角厩とまで云
ひうへとすゞむすゞとわづすまもひうへれきよ吸せし
字あへじあへ大字の二字の泰の一字を爲せるりはして泰
ハ余雅よ西風を泰風とひよと見えそれも泰ハかへのき小假た
け字さへかへ右ひうへたされみきのう浦や浦のう浦
やうく夜のうばひのう角れどと御へと御へむきりと御へと
れそりよへまふまと左と右と左と右と左と右と左と右と
左と右と

○作風の いき

考よ風ハ秋の清息それハ作風のいきとりふみゆいが、一氣によ此
つめたる頃也とめどとめてハのれ助語諺様よ遠くもさるもと
あくも清息の風といひてハかへね諺格也よく味ふてやくせ五
とせ 以も主師みて日本紀引得せりとて此もとぞ繋ひて
おもひたるハ作風ハ假字神饌稻とて假名とて假名に假名もよ
やあくびと門人長治川菅原へゆくひくひくの辛鶏もよひく
いひくは人ふもいたとてとてとてとてとてとてとてとてとて
経門人畠田村小家好平がひくひくは被里人假名を事へ給と
つくりとてとてとて上世の言のきりるものとて古傳ありかくら
方もの今もととくへいよく加年加是ハ神饌稻とて事うつ
よきと伊勢の國号も飯稻とてじとおやめのハ郡名よ飯

タカノ御聖事と紙よ／＼あることおやうきたり／＼とくくわ
／おに大御神のち／＼御鎮座も五十社の被長田／＼あ
へく豊受大御神の遷座も紙よ／＼あまとあやめ。彌ハシヒ
ミ撥霧集岡谷寺聽と／＼一冊をみてそきつ中。海おきり
投てアム。

○いもう祭 ああら／＼祭

茅柴東十一よ妹う賛上小竹葉野之あのあま／＼祭とく
地名代よアモアモ／＼モクツアモアモアモアモ
マリに京師の門人城戸千種うひんじは尼ハ良ハあもアタリ祭
水もくすむ／＼茅セヨ夢れもにつばてアモキハ小竹島の磯
哉波之あくもあしわもとくす平今ホフナリ／＼萬トクム

支守云今本宿
とあら白ハ物の
湯と又云

た軍樂冲ハあね島とよみて伊勢とそれと次下の寄よ竹島乃
阿戸白波者とひすきええて近石の國代地名セモクスヘ右の小竹
修もあう／＼ゆく／＼とて近石の木ととくもよ見よ上小竹
祭也もあきあうだれとよみてあもあうねとよふきよ御は御か
は／＼同裏／＼よみけをねれるもよともよ味う賛もアコロヌ
ぬようきれつ／＼ひう／＼とくとく

○あ／＼れぬと 萬は近にのあと＼＼折

走江／＼あと＼＼走をよみ合せたるいふざやあややに門人府事考
言ひのとく日本靈異記より江に國坂田郡走江の里とあると云々^{トホツアミ}
坂田郡と富勝郡とはもと隣もく。郡まであや内ハあや
跨る川をやあう／＼ひがよき江のあや川とも竹傳のあや

川のりよめのうるそくとひ

○あまもあ

先ハ師のむき訓るべよーかつ年宣もよめでやくよ宣も已、
考をいたくもでよろあわじてその門人中も多は極矣しとを
ゆえとてよ産う略解みも幸う佳絶小も已う訓のよしに因
訓をいたすとその訓ハ靡相之嬬乃命乃多田名附柔膚尚
平柔ハ亦胡とよみて劍刀於身副不寐者烏玉之夜床母荒良
無所虛故塔俱敵兼天兼今かよ魚よれで較魚の氣多數薄多
苗よねりてきよと相屋常念而玉垂乃越乃大野之云云めくともー
卷十七より氣太之久毛安布許等安里也等云云めくともー

○あまもあ

まの云れ解互第三の寒樹の落葉よつひへまくー、うきより
てもくいさりいどもとくと因もあてえまくいふとくとの署詔附
説よいきよとくれいさふと鯨魚のすくと海よつは發語
えといへと事ニマ鯨魚取淡海の海とあるハ湖よーとハ
きがれが鯨魚ハ必假字あじひとおもひて考へた不知魚取と云
てて西字よくよさるハ筆者集字いとひすよ不知の字と有
ひたようおやくて即ひきとつよみハ不知見えなハ魚をつま
うき可食ぬと奈くちも草を多可年奈とす奈も是イサナトリ
居了魚を網してとくと或ハぬしてぬを不知魚捕とつりよ
うきよーとと又罷としてますとあるといひいをくまくと
いさりとくととと暑せり、つくてあまくハあののさうの萬倍

あきハ不知の及みて顕出たるといふ事なれば、うへ比上
と顯りてたるものれを丸をあくすあくすとそりよけられ
居リアシテヤクホウシタニトコアキス

○ 麻裳吉 木道

あの登語師院はうへりひらうの字のとて麻とて、
たゞ一茶室十九直佐麻平農者織服而とある是也。よハ呼
うけたる云あへ助侍とて、麻裳よ着とくつこよつまゝ居候
○ やまとたちの へじよ

先ハ第四の考據の並御す。先々も今とのうへりとい
えし師院は、陽のとくわざとあどとあうべ、劍大刀とれ太
刀の鞘サヤとおりとくまと機カツキち刀とくもくとあハ構ルくふどよ

まちくと辞也、陽のとくわづとひとへ替りよとを益
のとくされまし今を古まみきうりよあこまて天の下よ古風
を唱ふるも乃も多されても莫弊モヒニカと用ひ易く解せるもの
此福シラフくよ耶よハ、いふよくや是とくも陽のとくわづと
て、仰候よゆけの術ハセくとひなよハ古風を爲く新むるのも
あもとで、空氣フミよゑきとどくやきと己オレよりかくともぐて
仰候よゆけのとくも自ののとよ求むとくよりさくとくは古風
とゆくよくあくはくうゆくへこの境ヒタチとくわづ、體ヒメえどく
てへつよよくへがつよくつまよゆくゑきと傳ハシマばへたよくと
えまよくぶつくの延言ヨシマシととの傳ハシマばへたよくと
つまよくと又傳ハシマのとくわづハシマとくわづへ登傳ハシマのたきり

行年四卷引得よし

○あくふと廻

此の國

是も榜布の食のゆふとつまよひに發徳する
きてあらハ榜の穗とあくづねとろいひてすなまを
食くもひへんハ益めらるゝや故考へれども、其
の字のとよて卷の十六よ商變領為跡之御法有者許曾吾
袖尔來居乍まの領の字を去ひそりてたりつゝて
づきたるハ領着のとよとへ又卷十四よあくふと廻あく山
の筋をとむる所あらばのあ所ちとえてもとあるハ榜
食ハ領著て廢されても子等う説教のあらうよだとうと

モテ領とゆきとすカでハあく山の筋をとむとよつゝ
いふやもやねとへうくもとぞ食とゆゑ用めよめひ
○あもまくも

是も因次よ以蔵為枕高之眼目故欲言之始有此言乎と移化
よりてよりてゆきとてくもとれとくもハ蔵とくも
無益のとくもとれとくも枕中もとれとくも眼目ハとくもとくも
きハとくもとくもとくもとくもとくもとくもとくもとくも
古文卷一卷五よえたり蔵ハ取東ひて枕とぞれとく

○おもやくの とくも

師役よはりよはりとつそれとく山隱き。西もおやうる
よ治院のとくもとくもとくもとくもとくもとくもとくもとくも

母理國志多備之國ともづれたりとハ言をあくわくめりて
て集守を考へるゝ卷三四辨吾大王者隱久乃始瀬乃山爾
神左備爾伊都伎坐等同四十隱口乃泊瀨越女我手尔纏
在玉者亂而有不言八方同同河風寒長谷乎歎乍公之阿
流久尔似入母達耶同辨隱口能泊瀨之山之山乃際爾
伊佐夜歷雲者妹鴨有卒卷七四十隱口乃泊瀨山尔覆立
棚引雲者妹尔鴨在年同同狂言香逆言哉隱口乃泊瀨山
尔廬為云同丁廿六隱口乃泊瀨之山丹照月者盈是爲焉人之
常無方等のうどつゝ考もハ泊瀨ハ上古の葬所にて山城
の都の名跡山の難とあくとたゞ又奏十六事之有者
小泊瀨山乃石城尔母隱者共尔莫思吾背とある石城ハ米五
石城也

おとものさり岩の庵への陵墓とひもふて城ハシミキの役は同
取圍ひ 石城よあもとハ死して葬埋せしめとちせ此歌の
ことを上の哥ともに引合て考もハ隱口ハ隱城の移行たる一終
五常よさて泊瀨よかくハ終とよきよつとて別墓ハ裕ヒヨト
うゆくえうじくね又お詫みづくをえうすくいふ終處のを
かくあともゆりつゝ又倭姫命世代のちゆつとめりと
下部のとおは備く下部ハ美望五の裏の古日が死をふうよ之多般
の使於比豆とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
なめて後古事記轉白子の傳哥よあれことのりてたゞとくとく
ふよとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
四葉解の方祀よりて
りとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ハキツカサニエ
トヤリモウシモ
モトアタリモル
フマカリミスカラ
クの波船沙のか波
のヲナセマヒ
ミモアリセミム
トクモアリセミム
トクモアリセミム
ミモアリセミム
ミモアリセミム
ミモアリセミム
ミモアリセミム
ミモアリセミム
ミモアリセミム
ミモアリセミム
ミモアリセミム
ミモアリセミム

○ 餓

餓はうまれとくひあとくし土佐日出ノ船路をもくるのも船
ひけととあひて御宿馬の鼻をうめふむけちゆとくれ宴
ヨリヒヒとととお望ま十数よるむこうあもたくろくとの牛
こう鼻纏波又例へあひて牛の鼻をひくともりとてきをる
鼻とくもひいふそやまつさき馬の鼻ひあといひて宴をす
とりのまくらへり是驛の初設とくとく初をへぬどりくは
上ふもくとくとくとく十九束うちれ花をくにし霧雨は始水
とある始水を今すよつとくとくとくとくとくとくとくとく
ひ事設ハひくとくもあてむけ備るとみをむよな
くともちん御よ備ふるをべ

饑欲を設備く營むとくとくとくとくとくとくとくとくとく

饗宴のをもく

○ 刈婆加

某某四季秋の田代穗田の刈婆加香綠相ハ卷十も秋田吾刈婆
可れ返去者雁鳥之喧所聞冬厅設而とあひ田中道磨り役と
て尾張美濃などとてハ田を刈みも残るみもいくもくとくも
ありてキヒハ三人にて三もうふ残五うよ残或ハ五人にて三
もくよ残ナムとて残も刈もどるゆゑよつもあれば序と
き男女ヰナシとて残も刈もどるゆゑよつもあれば序と
並んとつてあれ迄右の哥ノモアハモナリくゆゆきと
卷十六よ天爾有哉神樂良能小野尔翠草々斯々婆可尔鞠立
毛とあひハモナリとくも決完^メ又卷十四よ信野道ハのま

の波里道可利婆祢尔あ／＼す／＼むえお波氣マウリトアミ
たる莉婆祢ハやゝ同一云那／＼ふい／＼上のもあてハルルト
今まれ事／＼よもて考へに莉モハ新よ鑿／＼道よ木艸或ハ網
竹かしの根が波ア立モとつまねくその莉婆ハ簾とい
ひて即簾亨莉又の畧語と云う事アモ三卷經耶麻尼のる紀ノチ
さて莉婆加の加ハ處と云ふ字アモ此モカサカスモニラ
木をかりえりといひ莉破せ。根とうらものとハツクタマツ
故稿中でも堂小てもいつくまんめくとてうにか縁合の序とセ
ルハ簾入ヘ熟る福穗行さる者アモれを不あづけたるなべ
○あー卑の やま

美琴四ノ巻ふ迄も出

○浦回 磯回島曲

されこと師ハ和と訓モ宣モハ麻トナミナシトヨリサヌアリ
和トナムル俗モ麻トナムル俗モナリシテミニ訓ヘミシナシ
万とヌシケルナムハ磯赤浦赤トキニ西島村ニアリコニ未セ未だ後モアリテ今
本の訓ハヒツクシマミケル巻十五よ伊蘓乃麻由トアリハ石のうる小
て回の字とハぶえも他ハ巻三よ磯前榜手回行者とありて回を
美の假字ノ用ひたり又四よ稻日都麻浦箕乎過而ナリト松委ト
く第紫四ノ巻不だ工ノアリ

○あすさうれ わみ

先ハ天よ放アゆマハ日くつふもてむの一ミヨカズレ
發語ノ神后紀ノ天照大御神の宣マ志ノ大御言ノ天離向津姫

と宣焉一ハ即日の傍あとなむとれども

○みちじよ きせ

先ハ區志考より舉たり大膳饌より備ふる區志とつよきよけく
云々區志ハ酒の古名久志の約り算もひよハ備ふるといふ
又ゆく手向のひよ小國

○著むう なせ

著備ふるがとつよ一云よりきりねハ魚よまれ菜よまれ食ふとどよ
嘗てり出でるまこと三卷解のふ記名くまの際よりと云ふ

○なぬよみのかひの國

○うちよそむ まよ

○ひくい まよ

○ちくくろ ばく

右の四條ハ區志考より出して委へくせむわやうれども区考
規の落葉よもよもくづきハめつゝ一もも見れハ省あり

○見常衣

門人小ゑ好平が問ぐるハ第十一卷希將見君乎見常衣左
手之執弓方之肩根搔禮の哥音ハ尚可也例と承りつゝ
礼ととら見たるハいゝとひくと右ハ宣モウ詞の玉の弦ふも
主に走波喜くの哥代牛よむせを言也 皇朝学の達人とひく
とも第十一とおきてハいまだらまき色ハオニウと見常衣とよ
むへー下ととく文。ハ體語すと更る例と見ぞ見ハみとよひべ
まえ常ハ登古の訓と假毛とあるもハ礼ととらひよ格毛とハ右

の哥を表波遣て。小ちくに今かの刑の強きるを等閑よりも
あそびれむ。あとう。

○阿由志太

豊後國佐伯のまき葉三溝のじくすとだましよ予歯の抜
たゞとつて先生お歯うちえす。たなとりくすおれもといひく
をあそびいづるまくやとひくさ三溝うひく。ハ
西國ふて葉の類の梢よちるを薦し前をあやそびひおれ
はく。葉るをあそぶとくふもくとくわく葉あわく。とくを
いへども古き今血をあやそびりとあわく。まく葉卷
十八よ携の哥阿由流實ハ多麻よよよつゝもく。傳て又もくも
あうへまくとくもくハ唐たる。實ハ正よ貴重よ傳く。又卷八よ安

要奴うに花咲よクアトロハ。おわく。花咲たる。又春
十よ水草の花の阿要奴蟹ガニ。うき是も上よ因。源氏よあえく。小
ええすてあらもきのあやめ。やうにえあとくとくとくとくとくとくとく
やう方多うは古言のあきよと多ようきに二男正睦の病。
時松波よ連行て門人土佐の國人小松親枝の療治を。うあ。と
足その葉のせねよみの丸茶麻あざよ。腰ヒダ。とあく。うあ。と
だとハ。いづる。もどく。向々れハ。土佐の國みてハ。紹志。と來。を。ご。茶
き。を。か。ご。と。ひ。や。と。見。ハ。お。の。方。ゆ。て。行。を。茶。麻。ち。茶。麻。ち。茶。を。と
もい。か。あ。と。あ。が。の。葉。ふ。例。ハ。も。ご。と。く。と。茶。麻。ち。茶。の。例。あ

上よつたきこと古言く萬葉卷十四二十とあかの
の條より下をあはのへたもすにあくよも同卷より
あらゆあしたをあはのへたもすにあくよも
卷せふもむくわきうじれぬとあえあくよとあるも越
志承小々

○中やす さやの中山 鮎の中山

門人甲斐國卑河廣海云右等の中山ハ長山と云ふ
中と長と因言する。已既に清濁論辯よりをひいあす
けその邊ハ雄畧紀より中蒂姫の皇女更名長田大娘皇女と申す
あらへモ蒂と今本よあくよも。ハ説く處このへを省く。云
て魚とよむへと云ふハ中蒂長田全曰く長のう上古ハ
陸あるある邊と云ふもく横たきうや。山をりふきし古

今集ニ模倣をあせるさやの半やすとちるとして地もあくよ
卫えくよ

○中海

萬葉卷十四信濃國水内郡の母よ中麻奈尔とまとれのあ紀
てふえあふふくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
よ麻奈ハ真砂子みて今のは中島とづる。じとくとくとくとくとくとくと
ふねの波をよぶ。おそれハハうめくやあくとくとくとくとくとくとくと
小舟ね半うじとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
のば、千隈川へ犀川ともとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

村の内よりもとりて

○山とりのと良のとつ城

萬葉集十四夜麻杼里乃乎呂能波都乎尔可賀美可家
刀奈布倍美許曾奈尔與曾利雞采

此哥四況は魏時南方獻山雉鑑形而舜とりよもとあをぞの
をすを「ある哥とのいも内とハ最末尾也とりへとも末尾よ
ひうて後とくづよどて四況へおきての強況を久考
ある十四の卷ハ師況の如く岡本の宮の末藤原の宮の初めあ
るの哥とええて毛姓集序よりもくうこよアセモだいとぬ
ふととその頃鄰人の哥ふもサ國の故事をとむるハと
さくちよとすとて東の國人の哥よきの故事よとくよ

ら教師ハその頃京師人の東より下りてすゞ「かのう」と
四況とたゞけき一ハ異なり考もあうきるゝへと近づく
畠解とくものよ或人の況とて山鳥の尾呂の後とは山鳥の
尾よ光あらとひひて下の刀奈希倍美ハ捕べこの邊ゆて
山鳥の尾の末の光とえさて人よもづくとりよどりく
ひとくうきたれ況ゆて取よとく又尾よ光めちとひうて階
うけとそりてや古学者の筆墨と解ひぬ可憐可歎右の哥
ち初めれニカハ毛姓とひじ糸の序と毛内とハ後の尾
みて墓をひよくとくとくとも終慶ゆくとく今のも
えうとくねばうやおうせぬ又哥よいづくともうなどりつも
終慶こその終をもくとくとくとくとくあくとくあくとく

このものせとゆる發語ハ隱城之終とゆるもふて墓といひす
たりあとで城ハ十六ノ巻事あらもと小も内せ山の岩城ふも
隠城みまよおもひをわざととくとゆきとゆき隠城岩城の城ハ奥
津城みまよおもひをわざととくとゆきとゆき隠城岩城の城ハ奥
事ハ上古のなまくとて豊國の鏡山河内王と葬山科の鏡山
天智天皇とて上古の葬儀ハいとあるもうとてはれとも天照
大御神の岩戸ぶとくのときの神事より事あらも
五ハ大御神の岩戸と出でて再々モと思つまもあとひ
へ大和國成務天皇の御陵と今猪瀧山とゆすとゆすと
かすゞハ呪屋根命の故事よなびして祝詞とたゞあとゆ
きとて上古の葬儀ハいとあるもうとてはれとも天照
大御神の岩戸ぶとくのときの神事より事あらも

如く再世又出するひよとと称といひもと上古の風俗
佛の説よまよえさをねいめー人の人情とおもひゆじべー
あうーハ右の奇ハ墓處よ後うけてあらもとてても他よふと
極まはふとぞとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
や識者のきとを俟とゆき

○こうぬく

萬葉集十六ノ端寸ハ為老夫之歌丹太欲寸九兒等哉歟

間毛而獨居

さむよおのきの筆本日本紀皇極紀よ感とうすけとよみ
もて感服して居らじとゆきとなじとゆきは若者見るのを
そ迷惑ぐるといふやうのあくとせぬあれとくとくとくとく

みて右の号甚とみゆきくゆとりもす。國内かうし。上田を
こそハ傷くやうの事とひやむるといふ。ハ古をよたつ。

○ 烟被 尔胡也我下

こもとと莫然未今いたるつぶとあとどもたる。ハ火氣上行也と
字注のあきハ熱きをみてあつともつるあるへ。今をどこハ古
事記よ阿夜伽岐能布波夜賀斯多尔年斯夫須麻尔胡夜賀志多
尔多久夫須麻佐夜俱賀斯多尔とあきハ蒸ハ牟斯と訓べさよ
決きりさてこの云のを考るにすづ古事記のすの阿夜伽岐
ハ綾垣アヤガキ小て慢帳壁代の類をりふるへー緒垣ナカモリとりふる称牟斯夫
須麻ハ越被ムロミ少て下に引敷被也シマハ身代ヘ代多久夫須麻ハ上
よ龍敷タヌキ被スカへくおりへよーありきりハ古事記のすの注

小も又善紫十四多久夫須麻志良夜麻可是能宿奈敵杼母古呂
賀於曾伎能安呂許曾要志母とりふるにいへるを併せアラント
榜衾シラト新羅シラトとかく發語を榜のゆきとつくと仰ひられ一ひとあつゝ、
榜の極或ハ榜布シラヒひてよ是なんと衾シマともいへるハたゞゆきにかかる
のもの發語シラヒねどあつて古をあえらすをりふるものにあつてこの新羅
符らせたるものちと着のをあつ又至十四なるもふをう鼈衾タヌキシマとりふえふをゆ
はと榜シラヒ一ねをひくよしす。うくおひひて後立アフタてうのあつぶ
領ふてゑとひふちるへば、うくおひひて後立アフタてうのあつぶ
を兩と別るとれりふ小毛もむをひ放きるものひしてよつ衾
なりーー上と阿と絶。即アシマ越被スカふ對アリの名ふこそ考ル事
て今をに次のを奈胡也我下丹とあるハ誤り中柔の字
を尔岐尔胡とよみて奈胡とづじ併ひともうよふニ柔虜
少尔胡波タタまつて古事記ふ尔胡セとあきハ奈ハ尔をおもが
めたるものあるをおもひあはらめてよ下ハ裏の義ヨウリハ

卷十六 竹取翁下巻を累當とあらとすうへして心地ま二天雲
之五百重之下丹とあるも裏なると観へ一於この云ハ竹取翁
のすの解ふいへるをもつる

○みあきむく

各々量之集
られかきより
つまりシテ
もさが着の川
波うちアリ
クレトアリ
トのモリス先
は

村因多麻とひきらくみあきむくといふやと順移行のすみも
後成マのす小もあきとこも義立うのうこへを居ふもす一
小かぬきへゆくは従いうえ光音云まくあきをみあくとよ
びへきう禮の字とレの假字とのそきの人かにシミトラの假字
ふ見いたる例も祭事集中に所くなくなり是ハ薄音レイされハ
レの假字ハモトトシムて又吳音ライうもハラの假字ふも用
ひづまことハあら禮ね原つふ禮石さく禮石さく禮種の數の

支守云礼ハ盧
啟切也

禮ハみあラとよひベシ。その訓の俗説莫望四の本お記ふ悉
く舉おけとするを禮とレトドミ來りしより禮と難の訓の混
一すあすこありて和名抄にも混じたるすそくたりさて延喜
式加茂系の條小下社上社松尾社別阿礼料又色帛各六疋下社
四疋社盛阿禮料舊八合下社三合上社五合云云明檣四合官物又
一園韓神三座祭條荒舊八合又ニ鎮魂祭條鹿舊一合又三御禊
條鹿御服二貝料布二段五色薄絶々右に所引の鹿舊鹿御服
又三代實錄宣命に加茂齋院を奉らす事を阿礼焉等咩止奉
給とりよ云あり是ふと合せ思ふ小あらハ明白清淨の云ふて
明の暗語へあつちハ是ハ伊勢ふて明衣といふやかて朝廷ふ
て、齋彼といひ加茂みてハみあらといふゆきへ一齋院を

冬守云大和法に
傍らともなよと
乃もひよとくと
おきりん人のねと
あくひよとくと
まに大ねさの引
もあくことあ
きとねまへ振麻
の暗法すく

あれをとめとりふをもてあらハ齋のきするをかり齋服を伊
弔かて明衣と云ふてあらハ明白の暗語りをかきりそくえ
のゑハ神祇令ニ云一月齋為大祀三日齋為中祀一日齋為小祀と
あうて加茂ゑハ牛祀みて午未申の二月せきの初の午日みあらや
あうハその日明衣を下上社松尾社ふまう神人氏人モ齋
服を着ゆきハ二色をか配するをまあれむくとハりふうべ
むくとハ今世盃をむくと云むくや京師にてハ冷も熱家の
官被とぞぐめ下との衣被もたのゑの日よりえれ被ふうす
ハ是りふなるべし古ふむける鹿管のあらハ明檣の明字明
白清淨のとぞまく明檣の明ハ韓檣とりふうらと同義す
うらとあらといふもうる淺ハ古事記ふ蛇の韓鋤とりふ

を日中紀小ハ蛇の荒正^{アラサ}とあうととて明^{アラサ}らまくひとりへ云ふ
を古事紀小ハアト^{アト}ととを省き日中紀小ハカトヒ^{カトヒ}と省くると
のえあうらハカヒと明白清淨のとぞきを一物^{一物}とよろしく
のとづ^{ホノコト}褒綱^{ハラマコト}とうきうあのうちとりふをふとくをうらあ
ふからむたとづ^{ハラマコト}敷のうらハ彼土うら後アヨシ。おとづ
きううら^{ハラマコト}かくら表うら^{ハラマコト}桂うどの類のからハあうの暗法明
白のやめ綱^{ハラマコト}から梶からら表をからうこの類のからハからうの
ううらを撥發のあるとりふ

名古屋の事にあへまくす
よみぬことてあそひるやとに
父のうきのこへおふれ／信濃漫
游櫻の花繁とあそばれどもさう
かうりてねふゑととくとくとく

斗頃

ちうりれこゑ櫻の花繁と
うさつゑつ
色ありけりと
さん人もが

文政元年十月 菅本因久守

荒木田久老人著述

信濃漫漫錄拾遺

近刻

五十櫻園藏板

文政四年 辛巳五月刻成

名古屋傳馬町二丁目

製本書肆 美濃屋清七

